

# 『M／Tと森のフシギの物語』論

綾 目 広 治

## 一

『M／Tと森のフシギの物語』（一九八六・一〇、以下『M／T』と略す）は、ミルチャ・エリアーデの宗教学などの知見を活用した物語になっていると思われるが、エリアーデの援用に関しては、たとえば平野正久氏がすでに部分的に指摘している。平野氏は、『M／T』における樹木と死生観の関係の叙述にその影響を見ている。

しかし、その援用は部分的というよりも、かなり本格的であり、エリアーデの宗教学が物語のいわば下敷きになっていると考えられる。後述するように、下敷きになっているのはエリアーデだけではないと思われるが、エリアーデについては他の著作（『生き方の定義―再び状況へ』へ一九八五・二〇）でも言及されていて、たぶん大江健三郎はエリアーデを身を入れて勉強し、その成果を『M／T』

に取り入れたと考えられる。まず、そのことから見ていきたい。（『M／T』と『同時代ゲーム』へ一九七九・一一）との関係については後で触れることにする。）

この物語の語り手は、祖母の昔語り（前半部分は神話であるが）の特徴を次のように述べている。祖母の話を「懐かしいと感じ」るのは、「それはこの森のなかの谷間で、はるかな昔に幾度も幾度も起ったことだからではないか？」、「祖母の口から出る言葉のいちいちが、いまこの言葉で語られる物語は真実起ったことなのだ、と信じさせずにはいない」、そして、「歴史の話であるのに（略）神話になってしまふ」、と。さらに「祖母から話を聞くうちに、――まったくこれは永遠のようにも永い（略）。それでいてまた祖母の話には、あつという間に村がつくりあげられ」たという「印象」もあり、また、「祖母の話には（略）しばしば時の流れとして辻つまのあわないところがあったのです」とも語っている。

つまり、祖母の語る話は作り話のようでもあり真実の話でもあり、しかも出来事は繰り返したかのようであり、そこでは通常の時間がいわば撥無されていて、通常の時の流れでは辻褄のあわないことが語られている、というわけである。エリアーデは、神話を語ることによって「俗なる時間」は——少なくとも象徴的には——廃棄されるのである。語り手と聴き手とは聖なる時間の中に投げ込まれるのだ。」と述べている。その聖なる時間には、「1くりかえしの可能性」、<sup>2</sup>「いわば永遠のうちにあって、超歴史」とみなされているが、それは歴史の中に「はじめ」をもつ<sup>3</sup>、という特質があるとしているが、<sup>4</sup>「M/T」はまさにこのような時間構造を持っているといえよう。

祖母の語る物語も、最初は江戸時代のこととして設定されているのに、やがて神話的時代の話、太古の話のように進んでいく。「壊す人」達一行が川を遡行するのは、時間を遡ることであり、原初の時に戻ることを意味している。彼らは、川の途中にあって水を塞き止めていた大岩塊を爆破し、その後五十日間雨が降り続けるが、それによって「大悪臭が次第に薄れ」、土地が蘇るのである。エリアーデは、洪水は「一切の歴史を廃棄して、浄化し」、「原初の完全なすがたを回復させてくれる」<sup>5</sup>と述べているが、『M/T』のこの話は、エリアーデが述べているような一種の洪水神話である。また、創建者達のリーダーが「作る

人」と呼ばれているのではなく、「壊す人」と呼ばれているのも、旧世界の破壊者、すなわち歴史を撥無して原初の時に立ち還ろうとした人達のリーダーだからであろう。エリアーデは「始めの至福への執念は世界開闢以来存在——そして退廃した——ものの一切の破壊を要求する」<sup>6</sup>とも述べている。

その後、創建者達は太古の人々のような服装をし、太古の生活のようなくらしを始めるが、「壊す人」はその時代の文化英雄の役目も果たす。このことは、「壊す人」が『M/T』のT、すなわちトリック・スターであるから当然といえるが、彼は「火薬の知識」だけでなく「水産にも知識」を持ち、「植林」を行い、「百草園」と呼ばれる菜園の整備もする。そして、「壊す人」を含めた創建者達は次第に巨人化していくのである。<sup>7</sup>

しかし、やがて「壊す人」は人々にとってうつとうしい存在となり、創建者達の謀議によってシリメに殺害されることになる。正確にはシリメの作った毒物を女達が「壊す人」の食事に盛り込んで、「壊す人」は死ぬわけだが、この問題については後で論じたい。

さて、「壊す人」亡き後は、「壊す人」最晩年の妻であり、一種のシャーマンの存在でもあったオシコメという女性がこの共同体を指導し、彼女は「復古運動」を行なう。

オシコメと「若い衆」たちの推し進めたこの改革を、

なぜ「復古運動」というのか？ それは森のなかの盆地の人びとの暮しを、「壊す人」にひきいられて新天地を創建した時代のやり方に戻す、という運動であつたからです。

「復古運動」は強制的な「住みかえ」運動でもあつたのであり、また、この運動に中国の文化大革命とのアナロジーを見ることができ、ここではその問題よりも、「復古運動」が祝祭構造を持った運動であつたことに注目したい。「頂点に達した『復古運動』が、谷間と『在』の家いえをすべて焼きはらつた」ことは、「僕」に山車を炎上させて川へ突き落とす「秋祭りの行事のひとつ」を連想させ、「僕」には「『復古運動』が秋祭りに似た（略）もうひとつのお祭りだったのだ、という気持ちがあったのです」と思わせる。実際の秋祭りでも、「志願して山車をひく人びと自体、『復古運動』をやる人と呼ばれた」のであり、両者に共通性があることが語られている。

つまり、「復古運動」は一種のオルギー（乱痴気騒ぎ）であつたといえよう。エリアーデは、「オルギーは、創造以前のカオスを再現することによって、この創造のくりかえしを可能にする。」と述べ、さらにそれは性行為の儀礼や収穫祭とも関わり、「乱痴気騒ぎは聖の経済において、救済的な役割を果たす。」とも述べている。『M/T』でも、やはり「復古運動」が、「耕作を豊かな実りへの勢いに乗

せた」とあり、また、「復古運動」の若者達が「白く豊満なオシコメの身体のありとあらゆるところに（略）赤フンドシでとりついて——祖母のいうところでは——タワケにタワケているのだ」と、その運動に性的な側面があつたことが語られている。

この後、「自由時代」は終り、物語はやがて「神話から歴史に移っていく」。

## 二

ここまでの叙述には躍動感があり、おもしろい物語になっているが、しかし、話が「歴史に移っていく」につれて、『M/T』の物語は生彩を欠いてくるように思われる。つまらなくなるのは、第三章「自由時代の終り」以降の章である。以下、そのことについて考えてみたい。

その理由のひとつには、エリアーデの宗教学や人類学など本来非歴史社会を対象とした知見によって、歴史時代を描こうとするところにそもその無理があつたといえよう。たとえば、亀井銘助が指導した一揆のところでは、「トリックスターらしい銘助さん」や同じく「トリックスターのタイプの人物である」原島リスケが登場して活躍するのだが、そこでのトリックスターよりは、歴史状況下の事件である一揆の中では少々浮いている。亀井銘助が死ぬとこ

ろでは、銘助母が「大丈夫、大丈夫、殺されてもなあ、わたしがまたすぐに生んであげるよ！」と語り、ここでは死と再生のモチーフが出されていて、実際に銘助の生まれ変わりのような存在として、今度は童子が血税一揆で活躍することになるのだが、この死と再生の話も、一揆の話の中では浮き上がってしまっている。

このところは一揆の話が中心になっているのだが、一揆を扱うのなら、たとえば勝俣鎮夫氏の一揆研究などを取り入れた方がおもしろいものになっただろうと思われる。勝俣氏によれば、一揆は、神水を飲み「一味同心」すること、すなわち、血縁関係などで結ばれた人びとの生活にあって、その縁を越えた連帯を生み出すものである。そこでは公正さ、主体性、自律性が実現されるが、それは神の水を飲み、神を媒介することによって可能になる。したがって、一揆には神懸り性（あるいは狂気性）があるわけだ、また、異形の姿をすることで非日常的な場に参加していることを自意識するのである。『M/T』でいえば、神水（あるいは「壊す人」の水）を飲んで自分たちを聖化することで俗権力たる藩や明治政府に立ち向かうという構図、つまり世俗の権力を越えたところで自分たちの聖性を主張する行動として一揆を描いてもよかったのではないかなと思われる。むしろその方が、後にこの共同体が「五十日戦争」で皇軍と戦うことの必然的つながりがでてくるであ

ろう。死と再生の話に収斂させてはならなかったのである。その「五十日戦争」も、物語の後半が生彩に欠けていると感じさせるものである。共同体が天皇の軍隊と五十日にわたって戦争するのであるが、『同時代ゲーム』では共同体の人びとについて「不順国神、不逞日人」という言い方がなされていて、その戦争が天皇制国家に対する反逆の戦いであることが語られている。『M/T』でもそうであり、二重戸籍というあり方自体、国家に対する重大な犯罪である。この「五十日戦争」では、共同体の軍隊は倫理的な高さをもち、戦術はゲリラ的で痛快であり、また、武器の調達などでは独自の国際的なルートを持っているように、この共同体はインターナショナルな存在であることも示されている。さらに、この〈謀反人〉達の軍隊はきわめてエコロジカルな軍隊であって、戦いの中で火が樹木に燃え移りそうになると、戦いを中断して消火作業に専念したりするのである。

このように見ていくと、「五十日戦争」の章はそれなりに読めなくはないものになっているように思われ、実際、大江の筆力でかなりの部分がカバーされているのだが、しかしそうだとしても、その〈おもしろさ〉は、〈思想的〉な潤色が施された単なる活劇的なおもしろさである。「五十日戦争」における根本的な問題は、この共同体がなぜ天皇の国家に楯をつくののか、それがわからないことであ

る。別に言い方をすると、この共同体が天皇制国家に菌向かわなければならぬような、共同体としての原理があるとは思えないということである。これが、『M/T』の後半部分が生彩を欠いているもうひとつの理由である。「五十日戦争」にしても、その戦いの理念についての説明や、示唆的な叙述もないのである。はたして、この共同体に天皇制国家と衝突せざるをえない思想的原理、あるいは共同体としての原理があるのか。<sup>10)</sup>

この問題を考えるためには、この共同体がどういう性格、特質を持った共同体なのかを考察してみなければならぬだろう。そこで注目されるのは、先に触れたシリメによる「壊す人」殺害の話であるが、その話にいく前にいわば予備作業としてフレイザーの『金枝篇』に触れておきたい。

### 三

『金枝篇』によれば、古代には王が弱くなったり老いたりすれば、感染の原理によって自然界の生命力も衰える、すなわち王の弱さや衰えが自然界に感染して、自然の豊穡を脅かす、という考え方をする部族があった。そこで、王の力が勢いを完全に失う前に王を殺して、盛りの勢いをまだ残している靈魂を、元気で若い、王権の継承者に移すことが行なわれた。すなわち、「その礼拝者たちは彼（王の

ことである——引用者）を弑殺することによって、第一に、その魂の脱出するに際してこれを捕え、適当な後継者に転移する」のであり、それは「第二に（略）世界が神人の衰弱と共に衰弱することのないようにする」ためである。<sup>11)</sup> この王殺しの問題が『金枝篇』の主要なテーマであるが、さらにフレイザーは、ある部族（パウニー族）では王の身代わりとなって殺された生贄の肉——したがって王の肉と同じ意味をもつ——を食べる習慣があることを述べている。「もし、生贄が神とみなされていたとすれば、彼の礼拝者はその肉を食うことにより、その神の体にあずかると信じたことになるのである」（同右）。こういう場合は王が神格化されていることが多いのだが、よく知られているようにキリスト教でパンとブドウ酒を食するのもそのような宗教体験の名残である。

フレイザーが明らかにしたような、王を殺すことで世界を更新させ、その肉を食することで王の力を自分たちのものにする話が、おそらく『M/T』の「壊す人」を殺すところに活用されていると思われる。といっても、「壊す人」は弱ったり衰えたりしたのではない。

このまま「壊す人」が自分らの頭の上に山のようにそびえていては、いつまでも新しいかわりめというものがこぬ。そう思うようになったのであろう。「壊す人」が偉い人であればあるだけに、谷間の村に新しい

勢いをみちびきこむためには、「壊す人」を殺すほかないと、思いつめたのではないか？

「壊す人」は衰えたのではないが、しかし、「壊す人」殺しのモチーフは『金枝篇』での王殺しのそれと同じである。すなわち、世界を更新させることである。また、「壊す人」が食べられるのも『金枝篇』の説明と同じで、「それは『壊す人』の『巨人化』した身体力を、自分らの血と肉のなかにとりこみたいという願いに裏打ちされたことだったでしょう。」と語られている。もっとも、別の伝承では、「壊す人」を殺したことを後悔し、「悲しみ傷んで、なにより恥の思いにまみれながら、その肉を食べたというのです。」とあり、フロイトの「トータルとタブー」を思わせる話が語られている。しかし、ここはやはり、『金枝篇』の説の方がふさわしいであろう。というのも、喪に服する沈滞の三年間の後に「人びとはふるい立って働き始めました。」というように、世界が更新に向って動き始めたとされているからである。

こうして見ると、「壊す人」殺しはフレイザーの説にあるはまる話なのであるが、その場合の条件として「壊す人」が王であること、少なくとも王的存在であることが必要である。もちろん、「壊す人」は当初リーダー的存在にすぎなかったのだが、やがてその権威は王的存在に匹敵するものになってくるのである。このことと関連して注意し

たいのは、「壊す人」殺害の役目を担ったのがシリメだということである。前述したように毒を盛った食事を運んだのは女たちだが、その毒の作り方を「壊す人」から聞き出す重要な働きをしたのがシリメだったのである。では、なぜシリメなのか。祖母は次のように説明している。「壊す人」は「ずばぬけて偉い人であったから」、それに匹敵できる者はいなかった。

それで村の人間の暮らしのなかで、いちばん下のすみにも入らぬ、下の下にはみだしてブラさがっておるシリメがな、かえって「壊す人」に害をなすことができるやも知れぬ、と思いつかれたのじゃと思えますが！

シリメは、「下の下にはみだして」いる存在である、いわば人外の民、化外の民なのである。ということは、シリメは賤視されている被差別民ではないだろうか。だからこそ、同じく〈俗〉の範疇には入らない「壊す人」によく拮抗しえたのではなからうか。もちろん、ともに〈俗〉の範疇に入らないといっても、〈俗〉からはみ出る方向は逆向きなのであって、一方は〈聖〉であるのに対して他方は〈賤〉なのである。そうすると、この共同体は、〈聖〉―〈俗〉―〈賤〉という構造を持っていることになる。このことに注意したい。つまり、この共同体は天皇制国家のミニチュア版の要素を持っているのではないか、ということである。

天皇と被差別民との問題について、沖浦和光氏は『天皇の国 賤民の国』の中で、「清浄にして神聖なる王権を際立たせるためには、身分制の最低辺に、ツミ・ケガレを一身に背負わされた奴婢」賤民の存在を制度化することがどうしても必要であった」と述べている。もちろん、『MT』では賤民の存在が「制度化」されているのではないが、王権と賤民とが相補的な存在であったであろうことは、「壊す人」とシリメとの関係に窺われる。さらに、シリメが「壊す人」を訪ねた時には、『壊す人』は、待っていた古い友達が訪ねてきたように、いそいそと（略）シリメを招き入れたのでした。」と、両者が近い存在でもあったこともわかる。網野善彦氏は、中世の賤民の中には自分達の生業の起源を天皇の名において正当化しようとする由緒書や巻物を持つ者が多く、「賤視の下におかれた狭義の芸能民、とくに庶民と深く結びついた雑芸に携わる人々の中に、伝統的な天皇が生きていた」と述べているが、このことは「壊す人」とシリメとの結びつきを示唆していると思われる<sup>14</sup>。

これらのことからいえるのは、この共同体がやはり天皇制のミニチュア版の性格を持っていたのではないかということである。であるならば、『五十日戦争』において、この共同体が天皇制国家に抗う思想的原理を持ちえていなかったのは、むしろ当然だったといえるかもしれない。こ

のことに関連していうと、『同時代ゲーム』ではこの共同体は「村」国家「小宇宙」といわれているが、すでに小田切秀雄氏が指摘しているように、国家という言葉は安易に使えないはずである<sup>15</sup>。反体制思想の系譜では国家「抑圧装置」という捉え方がなされているのだが、大江はその問題についてどう考えているのだろうか、と作者の見識を問うてみたくなる。そのことは措くにしても、『同時代ゲーム』でも『MT』でも、この共同体はインターナショナルな方向性を持っていたのであるが、このことと特に『同時代ゲーム』で「村」国家「小宇宙」といわれていることとは、どのように関係するのであろうか。さらに付け加えると、オシコメ達の「復古運動」の中で革命第一世代ともいうべき創建者達が迫害されるところなど、これはスターリン主義国家ではないかという印象さえうけるのである。

このように考えてくると、いったい作者は、なぜこのような共同体を創造したのかという疑問が出てくる。本当は、天皇制国家に抗う共同体の創出という問題は、すでに作者大江健三郎の中にはないのではないだろうか。あるいは、大江の反体制思想にはどこか甘さがあるのではないだろうか。

#### 四

さて、『M/T』では、『五十日戦争』の後、話が現代に移る。その中で、祖母の口を通してある死生観が語られている。

……私はいま、ひとりひとり個々のいのちであることを大切に思うておるが、『森のフシギ』のなかにあった時には、それぞれ個々のいのちでありながら、しかもひとつであった。大きい、懐かしい思いにみちたりておった。

「壊す人」に率いられて川を遡った創建者達は、『森のフシギ』に導かれるようにして谷間まで戻ってきたのであり、『壊す人』のような魂ならすぐにでも『森のフシギ』の中へ戻ったのだ、と祖母は語っている。そして、

ここで人が死んだらば、魂になって森の高みに登って、樹木の根方にとどまる。それも『森のフシギ』が、この森の樹木を特別なものにしておるからでしょうが！そしてやはり『森のフシギ』に励まされて、魂は新しい赤んぼうの身体に入るのでしよう……

と語り、『私と光さんは一緒に『森のフシギ』のなかへ帰る』ともいっている。

別々のいのちでありながら、しかもひとつのいのちであり、死ぬと魂は森の高みに登って樹木の根方にとどまり、やがて赤んぼうの身体に入る——という死生観、これはアニミズムの死生観といえよう。参考として似た例をあげ

ると、東南アジアをフィールドにしている文化人類学者の岩田慶二氏によれば、ラオスのある部族は、『ピー（精霊）は形を離れない。虎のピーは虎という形から離れない。カラスのピーはあくまでカラスと一体である』、しかも『ピーは一つである。虎のピーも、カラスのピーも、ピーとして同一不二である』と考えている。また岩田氏は、ムルット族の死生観について次のように述べている。

ムルット族の死者の魂は肉体を離脱してこの山に登り、山頂付近の他界の住人になるわけであるが、しかし、そこに安住してしまふのではなくて、再びムルット族として再生する。まず、山麓の原野に咲くイニンクンという名前の花となり、次に、その花をつみ、これを食べた女性の子供として生まれ替わるといっているのである。<sup>⑤</sup>

『M/T』の最終章で語られる死生観は、このようなアニミズム的世界に通じているといえよう。『M/T』を読んできた読者は、最後にこのようなアニミズム的な救済の世界に出会うことになるのだが、それでは、これまでの共同体の歴史とどのようにつながるのだろうか。もちろん、それはそれとしてあり、これはこれとしてあると考えてもいいだろう。したがって、小説の構成の問題はここでは問わないにしても、その場合の、それはそれとしてあるあり方、すなわち共同体のあり方に問題があることは指摘した



が、では、このアニミズム的救済のあり方には問題はないだろうか。

そのことに関連して気にかかるのは、いわば聖痕Ⅱステイグマの系譜が語られていることである。亀井銘助の頭には刀の傷があり、銘助の母とも義母とも思われる女性から生まれた童子には頭蓋骨の一部分を損傷したような傷痕があり、Kちゃんは川で頭に傷を受け、光さんも頭蓋にプラスチックを埋め込まれているのである——これは、ステイグマの系譜とっていいのではなからうか。そして、結局のところ救済はステイグマを持った人間にのみ訪れそうなのである。あるいは、光さんの救済を通して多くの人々の救済の可能性が示唆されている、というのでもないのである。そういう広がりをもこの物語の最終章は感じさせてくれない。

もっとも、光さんの祖母でKちゃんの母もいるではないか、彼女も「森のフシギ」の中に帰っていくはずの人間として描かれているではないか、その意味で広がりがあるのではないか、という見方ができるかも知れない。しかし、この女性ステイグマを持つ子供（Kちゃん）を産んだ母としてやはり聖化されているといえよう。銘助や童子の母も同じである。つまり、救済されるのは、T（トリックスター）とTを産んだM（メイトリーク）であり、したがって、『M/T』は、このTとMが「森のフシギ」に帰っ

ていくことが語られている物語なのである。

## 五

大江健三郎は、『M/T』の岩波同時代ライブラリー版で「語り方の問題（あとがきにかえて）」と題したエッセイを書き、次のように述べている。

『M/Tと森のフシギの物語』のために作った語り方で書いてゆくうち、『同時代ゲーム』ではどうしてもリアリティーを持たせて取りこむことのできなかった、いくつかの神話と伝承を、遠い祖母の語りの記憶のなかから、あらためて生きたものとしてよみがえらせることができたのです。

リアリティーをどう考えるかは論議のあるところだろうが、少なくともそれが修辭的な問題に深く関わっているということができよう。ここで修辭的というのは、たとえばウェイン・C・ブースが『フィクションの修辭学』<sup>18</sup>で述べているような意味、すなわち修辭（レトリック）という言葉の本来の語義にある説得的という意味である。たしかに、内実はともかく、天皇家の神話に抗してもうひとつの神話を語ろうとする意図があるなら、『同時代ゲーム』のように父Ⅱ神主の語る神話としてよりも、『M/T』のように民衆の伝承である昔話の形式をとった祖母の話として

語られた方が、その意図に即して説得的であらう。

また、これも内実はともかくとしてという留保をつけてであるが、その共同体を父系制（あるいは父権制）としてではなく、メイトリアークの社会、すなわち母系制（あるいは母権制）として描いた方がその意図にふさわしいだろう。たとえば、民族学の岡正雄氏は『異人その他』で、列島には母系制的な社会が存在したのだが、やがて天皇を長とする父系制的な社会に支配されていったと述べている。<sup>19</sup>もしそうならば、メイトリアークの共同体を創出する方が、その意図に整合的であり、したがって修辭的『説得的である。だから、『同時代ゲーム』よりも、その再話としての『M/T』の方が、うまくまとまりがとれているといえる。少なくとも『M/T』には「村」国家「小宇宙」というような基本的なミスもない。

しかし繰り返し返すが、あくまで内実はともかくとしてである。内実についての私の判断はこれまでの論述であきらかになったと思うが、さらにメイトリアークに関して付け加えれば、なるほどオーバーやオシコメなどが登場してくるものの、神話時代の共同体は実質的には「壊す人」を長とする父権的な社会である。たとえばオシコメが、ちょうど江青が毛沢東の権威を借りたように、「壊す人」の最後の妻だったことを利用していることを考えると、メイトリアークの社会だったとはいいたいのである。

こうして見てくると、『M/T』は、いわば建前と内実のくい違う物語であり、その反体制思想には甘さがあり、しかも最終章にいたっては広がりがない救済の話、もっというなら個人的救済の話に収斂してまった物語ではなからうか。おそらく、これらの問題は、『M/T』を越えて、作者大江健三郎の問題なのではなからうかと思われるが、それについてはさらに考えていきたい。

注(1) 平野正久『大江健三郎わたしの同時代ゲーム』(一九九五・七、オリジン出版センター)。

(2) 『M/Tと森のフシギの物語』からの引用はすべて岩波書店の同時代ライブラリー版(一九九〇・三)によった。

(3) 『エリアーデ著作集 イメージとシンボル 第四巻』(一九七一・三、せりか書房 前田耕作訳)。

(4) 『同著作集 聖なる空間と時間——宗教学概論3 第三巻』(一九七四・一〇、同書房、久米博訳)。

(5) 『同著作集 豊穣と再生——宗教学概論2 第二巻』(一九七四・七、同書房、久米博訳)。

(6) 『同著作集 神話と現実 第七巻』(一九七三・四、同書房、中村恭子訳)。

(7) エリアーデは、『同著作集 宗教学と芸術 第一三巻』の中で創世神話には「原初の巨人」の話が関わっているものがあることを述べている。

(8) 『同著作集 聖なる空間と時間——宗教学概論3 第三卷』。

(9) 勝俣鎮夫『一揆』(一九八二・六、岩波新書)。

(10) 小田切秀雄氏は『方法の過剰か、内容の豊穡か——

大江健三郎『同時代ゲーム』の問題』(『季刊文学的立場 1』、一九八〇・七)で、『M/T』についてではなく『同時代ゲーム』についてであるが、『村』『共同体』の具体的な意味・内容がどれほど明らかにされていないと指摘している。

(11) 『金枝篇』(二)第十四章(永橋卓介訳、一九六六・一二、岩波文庫)。

(12) 沖浦和光『天皇の国 賤民の国』(一九九〇・九、弘文堂)。

(13) 網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』(一九八四・二、岩波書店)。

(14) エリアーデは、「穢れたもの」と「聖別されたもの」とが、ともに『存在論的なあり方として、世俗圏に属する一切のものと区別される』を述べている(『エリアーデ著作集 太陽と天空神——宗教学概論1』一九七四・四、せりか書房、久米博訳)。

(15) 注10を参照。

(16) 「カミと神——アニミズム宇宙の旅」(『岩田慶二著作集 第四卷』、一九九五・講談社)。

(17) 「カミの人類学」(『同著作集 第三卷』、一九九五・一、講談社)。

(18) 『フィクションの修辞学』(一九九一・二、米本弘一他訳、書肆風の薔薇)。

(19) 『異人その他』(一九九四・六、岩波文庫)。

(ノートルダム清心女子大学)